

### 305 高齢者の子宮頸部におけるHPV感染の検討

埼玉がんセンター, 東京都老人総合研究所 神経生理\*  
笠松高弘, 亀井良政\*

〔目的〕子宮頸部HPV感染の自然史を知る上で、HPV感染率が低いとされる高齢健常者(閉経後)の子宮頸部のHPV検出率について検討するとともに、上皮の分化に関連するエストロゲンの低下がHPV増殖を抑制し、HPV検出率減少の原因となっているかを検討すること。〔方法〕対象は65～100(平均78.5)才で、子宮頸部擦過細胞診で炎症以外の異常を認めない81例である。検体は擦過細胞で、DNA抽出した。うち37例は萎縮性炎症がありエストリオール2mgを14日間内服し、その後の擦過細胞も採取した。HPV検出は26の型のHPVを検出できるL1-PCR法を用いた。〔成績〕エストリオール負荷のない検体ではHPV陽性率は1.2%(1/81)[HPV31型1例]と低率であったが、エストリオール負荷後検体では16.2%(6/37)[HPV6型4例、HPV31型1例、HPV33型1例]と他の報告にある50才未満でのHPV検出率とほぼ同様であった。〔結論〕高齢者では高感度のPCR法での検出でもHPV検出率が低いが、これはエストロゲン低値により上皮の分化が抑制され、HPVの増殖が少ないためと考えられ、真のHPV陽性率は高齢者でも若年者と同様であることが示された。また同時にHPV感染が長期潜伏しやすいことも示された。

### 306 本邦における妊婦のサイトメガロウイルス抗体保有率の変遷

石川県立中央病院  
千場 勉, 鈴木由里子, 西本秀明, 朝本明弘,  
矢吹朗彦

〔目的〕先天性サイトメガロウイルス(CMV)感染の発生頻度や障害の程度は母体の抗体保有状況に左右される。従来本邦では欧米と比較して抗体保有率が高く、95%以上の妊婦が抗体陽性であるために妊娠中の初感染は少ないとされてきた。しかし、環境も変化してきているので過去14年間の妊婦の抗体保有状況の変動を調査した。

〔方法〕当院産科外来において1980年～1993年に測定された妊娠初回採血時の6154血清のCMV-CF抗体価と、より高感度とされるELISAによるCMV-IgG抗体を調査した。CF抗体測定は50%溶血法に基づくマイクロタイター法で、デンカ生研社製CF抗原を用いた。IgG抗体測定はエンザイグノストELISAキットを用い、CF抗体陰性例に行った。また最近5年間の例では生年、経産別にCF抗体陰性率を比較した。

〔成績〕妊娠初期のCF抗体陰性率は1980年、1985年、1990年では各々7.0%、14.2%、21.6%と上昇し、1993年では26.9%に達した。IgG抗体でも1980年、1985年、1990年は各々7.0%、10.0%、12.4%と抗体陰性率の上昇が確認された。また、初産妊婦のCF抗体陰性率は年齢が若いほど高く、1970年代出生群は35.7%だが、1950年代では13.9%に過ぎなかった。また、CF抗体陰性率は初産婦26.7%、3経産以上は9.6%であり、分娩回数が少ない程抗体陰性率は高かった。

〔結論〕抗体陰性率においてCF法とELISAでは差が見られるものの、いずれにせよ近年の本邦妊婦、特に若年層での抗体保有率は低下してきており、今後重症型を含めた新生児CMV感染症の発生率の上昇が予想され警戒を要する。